

# やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

## 12. 安達峰一郎の外務省任用とイタリア公使館勤務

### ●外務省に採用、イタリアへ

明治25年、帝大卒業前に大学の教授連が峰一郎の国際法の知識とフランス語の優秀さを見込んで、榎本武揚外相に外務省採用を要請したといわれます。そのため、卒業後に鏡子と結婚したすぐ後、外務省採用が決まりました。外務省ではそのときの外務大臣陸奥宗光付で文書整理の仕事に当たったようです。そして翌年の7月、早くもヨーロッパの主要国イタリアの公使館勤務を命じられ、その月の31日に横浜港を出発して約50日間の船旅を経て任地へ渡りました。その当時、鏡子は妊娠中だったので大事を取って単身赴任でした。

### ●鏡子への手紙

その船旅の間、新婚早々ということもあってか、鏡子に27通の手紙を送っています。その手紙の内容は、同じ船に乗り合わせた方々の様子や寄港した港とそこで働いている人々の様子、そして妊娠している鏡子の身体への思いやりと出産後に峰一郎のもとへ来るときの船旅の心得やフランス語勉強のことなどまで書いていました。そのなかの14通が、今回発刊された『国際法にもとづく平和と正義を求めた安達峰一郎・書簡を中心にして』で紹介されています。

そのなかの3通に、寄港した港で見たヨーロッパ人とアジア人の関係から、日本の外交官としての任務を見つけたと思われる内容が伺え、これがその後の行動の支えとなった重要なものと思われるので、特に取り上げてみます。

8月13日のサイゴン(ベトナム)からの手紙に、「当地ニハ三人種アリ。仏人(主権者)、支那人(其下)、土人即チ安南人(ベトナム人)ハ殆ど禽獣同様に御坐候。優勝劣敗トハ言ヒ乍ラ、誠ニ憫レナルコトニ候。」(仏人=フランス人、支那人=中国人、禽獣=けだもの)

8月16日のシンガポールからの手紙には、「当地ハ其場所柄ありて種々の人種込み支那人尤も多く御座候。不相変、欧米人ハ上流を占め、支那人ハ給仕位の地位ニあり、馬來人、及印度人等ハ力役(力仕事)の最下位ニ居り申候。日本人ハ三百人あるが、二百八十人ハ長崎辺の賤女ニて、毎

度、領事ニ厄介を懸け候由、今ニ始めぬ難題ニ御坐候。」(賤女=貧しい女の人、領事=外国で日本人の世話をする役人)

9月3日、紅海北端に位置する阿田(イエメン)からの手紙には、「各港ともニ惑候ハ、欧州人種の外は殆ど奴隷の壇界にあることニ御坐候。せめて日本丈ニテも一等国ニ致すハ御互の務と存候。」(壇界=身分)

当時、アジアの国々はヨーロッパ列強の植民地で、ヨーロッパ人はアジア人を野蛮人とさげすんで、こき使っていました。そのような状況を次々と目のあたりにして、日本を植民地でなく、ヨーロッパと同じ一等国にしなければならないと思い、そう努めることが外交官としての自分の任務と考えました。

### ●鏡子夫人もイタリアへ

明治になり、日本外交の最大の課題は、幕末に欧米諸国と江戸幕府が結んだ不平等条約の改正でした。しかし、外務大臣などが欧米諸国と不平等条約の改正について執拗に交渉しましたが、なかなか改正に応じようとしませんでした。このような状況のときに峰一郎は、外交官としてイタリアに赴任したのです。

翌年の7月には鏡子夫人も、出産した子どもを山辺の両親に預け渡欧し、峰一郎のもとで外交官の仕事を支えてくれるようになりました。



イタリア赴任時の峰一郎と鏡子

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄  
参考図書：『安達峰一郎、人と業績』財団法人安達峰一郎記念財団発行 平成21年刊